

際大)より因子分析の手法に関し、四分相関係数を用い、共通性の推定値としては重相関係数(SMC)を用いる方が有効ではないかとの指摘があり、また福島より本研究の今後の展望に関して質問があった。

大浦(328)は、女性役割受容の特徴を明らかにするために、男性における性役割受容との違いを検討した。発表に関して小川(東京教育大)より性役割認知と職業や場面との関係について質問があったが、大浦はこれに対し、家庭や職場における性役割行動に対する好意度は、その女性のもつ性役割認知とその女性の感ずる社会から期待されている役割観とのズレに規定されていると述べた。

藤岡ら(329)は投影法的一种であるIESテストを高校生に行い、その結果をアメリカの先行研究の結果と比較検討した。このテストについては病院臨床の立場から、テストの利用可能性、有効性あるいはロールシャッハ・テストとの比較という点から質問が出された。これに対し、まだ我国では標準化がなされておらず、またすでに神経症患者や精神病患者にも実施し正常者の反応パターンとの差を検討しているが、その現われた差をどう解釈すべきかまだ不明の点が多いので、その有効性については問題があると述べられた。さらにロールシャッハ・テストとの差については、本テストは4つの側面からId, Ego, Super-egoの強さを測定しており、4側面と各機能との組合せのパターンから結果の利用が考えられること、また反応の結果が得点化されるので、ロールシャッハ・テストのような多様な解釈は困難であるが、テスト・バッテリーの1つとして使ってゆくことが有効であろうとの答えがあった。

伊藤(330)は、cognitive future orientationとmotivationとの関係を実験的に検討した。その中で、

要求水準とfuture orientationの効果に関する結果が仮説を支持しなかったことにつき発表者より問題提起がなされた。

鈴木(331)は学習場面における成功・失敗のフィードバックが自己概念・自己評価の形成にいかなる影響をもつのかを検討した。これに対し、福島より自己概念・自己評価の初期水準の差によってフィードバックの効果に差が生ずることが考えられるのでそれを検討する必要があるのではないかという指摘がなされた。また宮本より性差の問題、変化の方向に違いがなかったかについて質問があった。性差については本実験の場合ほとんどみられなかったこと、変化の方向性についても検討はしたが有意な差はえられなかったと述べられた。その他、稲越(立正女子大)から、実験直後と5日後の測定の間には子ども同志のコミュニケーションがあることを考慮して考察する必要があるという指摘がなされた。

II ま と め

本分科会の発表は研究対象として青年を扱う論文が多かったが、内容的には種々さまざまであり、いくつかの視点から深まった討論を展開することは困難であった。このため、発表終了後の討論は各発表ごとに、主として方法上の問題について質疑応答がなされた。

この中で2,3の論文に関連して波多野(独協大)より被験者に偽りの情報を与える場合、ことにそれがnegativeな内容のものである場合、対象が児童の場合、事後処理をどのように行うか、またその論理的問題等について指摘があったが、今後研究を進めるに当り看過できない重要な問題といえよう。

(片岡・鈴木)

人 格 (332~335)

座長 棕 野 要・永 沢 幸 七

佐賀大学 中 山 巖

332 音楽の好みの研究

東京芸術大学 中 村 均

333 興味発達の因子分析的研究

今治明德短期大学 ○棕 野 要

東京大学 柳 井 晴 夫

334 欲求(EPPS検査)と色彩嗜好について

東京家政学院大学 永 沢 幸 七

335 日本語2音節に対する好悪の評定 (4)

I 全体的特徴

この部会で行われた研究発表は人格332より335までの4題にわけられていて発表数も少なかったので発表聴取者も少なかった。しかし少ないことが幸しか忌憚のない意見の交換も行われ実り多い一時をもつことが出来たのは感謝であった。特別研究報告も同時刻に併行して開かれていたので出席者のかたよりも多少

見られたことは個人発表室と研究報告室の両会場における出席者を比較するとき考えさせられた。発表数の関係で討論は30分位で切り上げようと思ったが、討論の時間になると、初めから終りまで、きわめて活発に行われ、1時間の長時間にまでおよんだ。討論は、個々の発表に対する質疑や意見と、それに対する発表者の応答の形式が主となって進められていたが結果の処理の仕方や解釈などについて可成り突っこんだ建設的な討論が行われた。

II 討論の内容

とくに共通の話題をうけず最初の15分間には、各発表者が3分以内で各自の発表について補足説明を行った。そして個々の発表について順序不同で質疑の応答と討論が行われた。中村(332)の研究に関して中山巖(佐賀大)は4段階でなくて、3を加えた5段階評定にしたのはなぜか?そのために、ほとんどの者が3をつけるというようなことはなかったか?との指摘があったのに対し、中村は分析が分布の正規性を仮定しているの、無理に分布を歪めることとなる操作は行わなかった。また、実際にも全員またはそれに近い者が「どちらでもない」という3をつけることも起らなかったとの説明がなされた。永沢(東京家政学院大学)は、以前実施した音楽能力テストで女子の方が男子よりも、はるかに優れた成績の結果を示したが性差による結果の優劣はみられなかったかと指摘をした。それに対して実験は男女こみにして実施したため1, 2の曲を除いては、ほとんど差はみられなかった。

棕野(333)の研究に関して、戸田(職業訓練大学校)は被験者は男女どちらか?との質問に対して、棕野(今治明德短大)は、被験者としては、男子だけを用いた。男子は職業的に女子より多方向と持続安定性を示すから、手始めとしては男子高校各科基準の興味尺度を作るのに適しているのではないかと考えたとの解答があった。戸田(職業訓練大)は再び男子女子で興味の構造は異なるかとの質問をした。これに対して棕野はSUIB(ストロング職業興味目録検査)など5種の興味検査をそれぞれ因子分析し、その始めの2個の共通因子を軸として2次元空間にプロットしてみると、男子と同じように女子もHolland職業選択目録で得た6個の類型(現実主義者の、知能的)などと同じ配置をみた。即ち現実—知能—芸術など軸の中心をまわり、再び現実—知能—の類型に還るといふ二次元巡還論といわれる構造をもつという。多くの尺度では余り差がない事から学問的に高い専門職では性の差は個人差程大きくないという研究があり、興味そのものの性差は

あるまいという研究があるけれど、他の職業興味尺度では必ずしもそうでない。ストロングもキャンベルもまた男女別々の尺度を示しているのであるから、はっきり性差があるかどうか問題点であろう。戸田は(職業訓練大)発達とinformationとの関連性についての指摘があり、それに対して棕野(今治明德短大)は戸外の興味と農林業の興味の2つの因子の発達の変動が余りみられない。このうち農林業の方は、検査対象が岡山市内3中学生であるため高1高3と進学しても農業科高校への進学者は1, 2の生徒はあったかも知れないが殆んど無かったことから、その方面のインフォメーションは余り増していないのではないかと、しかも中学2年迄にこの因子を示す飼育栽培などの項目は小鳥が家庭園芸などからある程度の興味形成の機会があったのではないかと推定されるから、ある程度以上の興味の促進以上は余り深まらないというようにも考えられるとの解答があった。永沢(334)の研究について棕野(今治明德短大)は食物科(B群)を専攻する学生は比較的科学的な興味を持つ傾向があるのではないかと質問に対して永沢はB群は学部の管理栄養士の専攻群であるので栄養士の科学の興味は勿論あるが栄養士を監理する所謂監理栄養士なのでEPPSの検査にも他者認知、養護などに高い得点を示しているとより人間関係などに高い関心がみられている。との説明があった。中山(335)の研究について、永沢(東京家政学院大)は単語の熟知度は年代によって変容するのではないかとまた地域差によって相違はみられないかとの質問があったのに対し中山は文化的要因によって年代とともに変容したり、環境および体験の相違によって地域差がみられることは考えられるかもしれない。しかし福沢(1970)の熟知度を本研究の被験者に、そのまま適用した点には、あまり問題はないと考えるという解答があった。また中山(335)の研究に対して鹿内信善(名古屋大学)は発達差や性差を越えて共通の感じをいだかせる日本語、2音節が存在するという興味あるという上の興味から今後どのような研究に展開していくのかということについてたずねた。それに対して中山はかみ(紙・神)、うみ(海・膿)などのように一義的でない語については、どちらの意味での連想がなされたのかを解明していく。それから、同じ語について漢字を使用した場合と平仮名を使用した場合でどう異なるかを比較する。また鹿内(名古屋大)は好き、嫌いの評定に「感じがよい—感じが悪い」を用いた理由を指摘した。それに対して中山(佐賀大)はImae(1966)での日本語2音節の感情度の評価や、田中知己(1971)での日本語3音節の好悪の評定で用い

られているものを引用したとの解答があった。

(永沢幸七・椋野 要)

人 格 (336～341)

- 座長 原 一 雄・秋 葉 英 則
- 336 女性の生活史に関する研究
 一 1. 目的と方法 一
 実践女子大学 本 田 時 雄
 東京教育大学 伊 藤 裕 子
 “ 田 中 政 子
 “ 山 村 香 苗
 東京都立大学 川 浦 康 至
 県立新潟女子短期大学 ○田 代 俊 子
- 337 価値観の構造に関する研究 (2)
 一 職業観・結婚観・政治意識の関係系 一
 大阪教育大学 秋 葉 英 則
- 338 保守主義の構造 II
 保守主義と生活歴, 大学生のばあい 一
 広島大学 吉 森 護
- 339 教育に対する態度の分析 (1)
 一 大学生の教育観, その性別, 専攻別の差異の
 検討を中心として 一
 立正女子大学 稲 越 孝 雄
- 340 卒業生による大学教育の評価の試み
 国際基督教大学 原 一 雄
- 341 高校生の意味認知に関する研究
 沖縄国際大学図書館 大 城 宣 武

I 発表と討論の経過

各発表は, いずれもほぼ論文集にそって行われた。

討論は, 約 30 名 (発表者を含む) の参加者で行われた。その形式は, 各発表に対する質疑応答 (発表者の「討議希望事項」をふまえて) と全般的問題 (次項 [II] まとめ参照) の順にそってなされた。以下, その要点をのべる。

336 (田代ら) は, 女性の生活意識・生活様式 (「女性の生活史」) の変化の内容を年齢の差異のみならず, 「時代」という社会学的要因を考慮した方法で接近せんとする調査の方論について言及した。発表者の討議希望事項である「回答時において回想としてとらえられた場合の過去体験の『ゆがみ』の扱いについて」の討論が行われた。原 (国際基督教大) からは, 「ゆがみ」のない心理現象はないのではないか, また, 藤

原 (東学大) からは, 「ゆがみ」を生活経験をもとにした意味づけと考えるかどうか, さらに, 稲越 (立正女子大) からは, 過去の客観的事件・事実に対する評価をひとつのクライテリオンにしたら等の示唆的な意見がだされた。336・共同研究者の本田 (実践女子大) から今後の研究の展望 (時代性を考慮した発達研究) がのべられた。

337 (秋葉) は, 青年期の政治意識の発達にかかわる諸契機をあきらかにするために職業観・結婚観・政治意識の関係系を問題にした。上田 (姫路工大) から職業観, 結婚観に関する価値基準は何か, という質問に対して発表者秋葉は, 政治意識との関係をみるために保守・革新の尺度を用いたと答えた。本田 (実践女子大) から結果の解釈と被調査者の未・既婚の別についての質問がなされた。論文集にそって発表者秋葉より説明がなされた。

338 (吉森) は, 保守主義尺度を因子分析の手法を用いて構成し, 保守主義の構造を生活歴との関係で分析を試みた。これに対して藤原 (埼玉大) から, 一般的態度と特殊の態度の関係, 教条主義と保守主義とのちがい等について, 松原 (筑波大), 本田 (実践女子大) から item の妥当性について質問がなされた。発表者吉森は論文集にそって保守主義を定義し, その測定の手続を詳細に説明した。さらに, 三井 (国鉄労研) は, この種の研究方法として用いられる因子分析法の方法論上の問題 (構造, そのダイナミズムをとらえうるか, その見通し) について, 藤原 (東学大) が, 生活歴にもちいられているクラスの数に保守主義といかなる意味をもつのか, 質問した。前者については, 多数の要因 (各下位領域) の相互作用 (直交しているというより斜交していると考えられる) の研究の必要性を, 後者については今後の検討課題であると答えた。

339 (稲越) は, 大学生の「教育に対する態度」の形成過程を追求するために世界教育史上での典型的教育観に対する学生の見解について分析を行った。高山 (秋田大), 石川 (琉球大) から典型教育観の抽出・抽出の方法, その妥当性 (さらに権威主義的立場をも加える必要があるのではないか) について質問がだされた。発表者稲越は, 代表的な教育学・教育史の文献研究を